



四山藁

二



四山藁第二

隨齋夏成美著

豐島久城

采津包徳

齋藤包昌

夏目包壽

同

校

俳諧小言 十則

俳諧をみるはきくはこれに於て思ひを述る戯を  
おれの中に中昔まては多程言り乃といひ来れ  
然るに昔を世に翁よりけりめて詩歌の情を  
心を俗俤より多にありは多とたも詩経万葉  
心乃



古体は似たりしけれも此蕉翁の門弟子おのうろく  
ゆるりありて道のらまいたわうれき乃いほくくにみされ  
たむやうはひもてゆけを其のまゑくよなりていそ師乃  
ゆるり一つをそのはまひうけおのくくしうくに蕉翁乃  
一体とらひゆるり實に蕉翁をそそるもれといふ一うろ  
是をたしそ眼なき人の象しふ獸の尾をよて足をはくうて  
漆桶は似たり箒乃やうあるといそむらうくその象にあは  
るといふへいねるも眼乃人のはあとの象をそそるよろ大に  
あふへい一叔蕉翁の風雅をいふたそやうよにかの詩經万葉  
なほのそり船き草木魚鳥におほをけおまひをそそるやうに

風雅の心抱よけうておのけうなりし出せるあはれ人乃耳を  
驚くかく百年乃今もめて與まるといふ一は邪なき風雅の  
心乃根本に土いひあやうくゆきよいひおせりあはれそはいよ  
くよめけうくあはれく自然乃姿をそ侍るけり  
その詞なり出りに趣ありたへて新奇乃ふくそ豪邁の詞を  
けけぬるもそのも乃趣向けくなく俗意よりけくみおせそ  
外をうさうて内に実けくおそりて足ゆかい此在ありたへハ  
俗語鄙言ありもそやう風雅の心をうけうおそそ人の心にも  
徹底して鬼神をけけむへあも此系なりけれも古体と  
いひ近侍といへるもいさう詞のまういふて風雅の趣を

けしにわたりめあるるくすた蕉翁一世乃化意を盪せ  
しておのまじく醜を可く侍くそわのけく向上の一路も  
企至るる蕉翁蕉翁いはいへる事なり古人乃求をう依を  
まめり古人乃求る所をもめをや南山大師乃筆道を  
けしへる詞をもて門人ふふされり心をもくおもへと  
けしに末師を捨て多らに蕉翁の心を削り形を破て求る  
所を求るそのまじくおもひを深めて古き句をもんがけく  
経る句あまに心をもちひりくハ神ありて是を通じ  
るれまけり

句をけくくに至りてまひて雅を求へくすけしめて俗を去

あり俗ある心あり茶々に去捨侍くも雅におのけくくめてぬ  
くく雅なる趣め侍りき詞を求るゆゑにその求る所に  
つきてもや俗意の出るかな句はまじくいふれはひ志をも  
なほちかく乃まじくまひぬおのけくハ意の俗を  
あつたはまじく句を棄るるおのけくはまじくいふれは  
けしわをけくく棄るるまじくいふれはまじくいふれは  
再ふてまじくいふれ

句をまじく心けくあまの句乃心雅ありや俗けくやと心を  
せめて詞乃工拙ハ中二等ありくまじくいふれはまじくいふれは  
俗意ありて取へくハまじくいふれは雅趣ありはけくまじくいふれは

あつてもあつて嫌ふ屋の人の句をよむ事か此のくして  
たのましく句をみむもほしくか此のくする屋  
文章の實をよむ事奇言怪語をけしめぬも文章一篇乃實を  
木偶人乃めてよく持しをよむ事か此のくする屋  
かき亦あつたり世にみしの中にみし葉書するやうをよむに大やう  
哥物もよむ乃ほむるの形も同をよむるか此のくする屋  
言乃俤形よりかけあふ事狐乃表に貂をけし合せよむ  
あつて古より俳諧文章乃筆格より蕉翁に至りて始て  
世の趣をよむ事此の趣といふ何れや詩歌文章乃實をよむ  
なるとして俤語鄙言をよむるは此のくする屋の文をよむ

心好あつてもあつて俗よりあつて入むるをよむ事か此のくする屋  
文章乃よりかきし俳諧の工夫多し去俗乃二字あり  
俳諧をもて修身齊家乃道なりあつて或る老佛の心よむ  
よめて奇妙に説く事此のくする屋の道をもよむ  
せん中より却てあつる人乃識をよむ俳諧は此のくする屋  
物ありし佛の聖言よりよむ事俗中乃風雅を述る物  
あつて別に趣いあり多なり世の趣といふも世をよむ  
世をよむ事か此のくする屋の趣といふも世をよむ  
又七乃あつて葉にをよむ事か此のくする屋の趣といふも世をよむ  
くても戲言をよむ事か此のくする屋の趣といふも世をよむ

層々れを小道とくへやも親の魚交る所やまきと吾下の層く  
なりあも侍らば

子尔乎波のまて自得まへ一ぢぢ家層らむと誰もお解え  
する事よてぢれ侍ら乃相まをけくふ工夫のいぢ層うぢれ  
鬼神を流しむもあををの事まれとお解るにけい  
侍らうもてまぢら乃感の侍らむお解らその困を子尔波  
をも多侍らうぢま色の傳受は決ふよけあて子尔波に  
あまうぢらむ物まをのあまの常流平活をいへとも  
いとけ乃てまをあひぬれをぢの趣乃まあえ侍らあてもあ  
層一侍ら中の詞を世をもて變するもけあまを子尔葉と

いへとも詞のまをうぢて今古のけう乃あまひぬれを  
萬葉古今乃哥乃中い侍の世もあひるてふけも 粗んえ  
侍らあひてむけうくいとむ人うむむと能借一家乃子尔  
波をいもむあ

附句の前よをれまやう句毎乃轉變のけくつと定めう  
りれやも一これ理をに去捨侍らは無礙自在なる層一  
理をはあきて何よそ前句を附侍らむぢけのよにまよりの響  
うけりよそわつらあの一線路をけあひてけあまをけと附け  
りあまのけいもたにいひまきうもあまのけあまへた  
事けあまのけいもあまのけあまへた層うけいひる物と

と於理論して蕉翁のうゝてさうさるる文はれと後世り  
七名八体二十四体なりともそのふ初心のみらひきふり  
僧家りいふ名目部乃りあてすあも眼乃り交る考を論  
すはりあもさうさるる事なりと諸家の教方の俗をも句を  
求め句をほくむとせとさへも思ひて大なる妨をあれ  
難なり其のゆゑを風雅乃心のまをり理のなり物あれ  
也理乃りあもわさを理をもとたさん中もさるゆゑに水  
上り胡蘆子をほめさるるあもけひよいさりこれる  
りるあも理乃りあもさるる所謂あり一向に理を放  
下せしむるは多理におち入理り縛せられぬやうりと

おりの文なりけはは附所を定めは多物をあくらせ  
して付作むと甚無下乃りあもてあもひを編序題をも  
言をたて或は起承轉合りあて又天地人乃三才をさる  
あもさむいみさるる無用乃り辨にして附句の害あれと甚  
きは形  
去嫌も變化乃大体をあらへもさるる連哥式目乃古  
法を始して御傘噺草ホ乃諸書其のひひよくけま  
ひりるにさるるあもさるるはあもいよくはりといふ  
凡變化の道理をさるるわきあへけら文字もはらには  
あもはらひの一向乃縛變をさるるあもさるる案もさるる

第一句乃好惡一して片合も第二の論あるべし古人變化のまゝめにかうけうる法則あるをそ書彼書の空論をそ實地の附句を繫縛一かへして變化乃趣を成るる學者あふ心をねて變化乃事をもあせれけし一坐の争論はるみぬへ一本と諸書乃そあひ詞の教くいつある強記乃人形とせも一記臆せむるもかう一詞は無盡の物なれそ諸書の法則もその大綱をあけらる物なり一はとそみるに古法を廢く廢きたりけし

會席乃ありさほいと風流ある一はと花紅葉の結ひはくえあしよあは西行法師の扇文臺ふたりをう同調の

友三五人花晨月夕におよひをのこさひうあひよはきて情をゆひいとめてそまほひぬへ一懐紙の法堅懐紙横くそ一乃さうまうる法あれと今世の絨る物にさうかへけ句讀の志あう人りめてまむせむ聲乃言低りあやさうるをう一かへ東坡居士三分ハ詩七分ハ是讀あるといひよ思ひけらるあほ

世人の褒貶けしにあのみ履く次下里巴人の私する者おけく曲きこれそあするものいさくすくおきりあう今世の人乃きをよろあひてわの心にあもそぬ詞をけけ侍りあれ世に履のらよ嗚呼の考とよあし知音の人ひとあうあ





風情乃ちありとをばくせりあはれ世乃いはりあはれも  
 かを天ふもその地ふひろひて居て人跡多うしや形も  
 事ありくはれわさ形もへしあををよきをよむ人さる  
 ちの心をばくしとわひの中乃玉をばくしとぬの火に  
 いともなやうせぬけのひり至る形ものそや此集の  
 事急に一夜をそへしと事を困まてきあえあはれいま乃  
 栗のもやれはれと心をはくしと勝鹿乃野人贅亭成  
 美書

句帳小序 應汀島需

みくしあはれいさくはらふとよめを無心所着乃体なり

此体ありくしとけりて万葉集にもあはれ牛とよめ  
 今の俳諧はれそのあはれ心願一物形を處より形  
 出しきたるそふりもよく萬象とあはれをあらわす事奇なり  
 とよへし昔海のへ乃鷗をあらわすものあらわしと翱翔  
 浮沈りあはれひてひひもあらわしとあはれ事なりあはれ時此  
 かもあをあらわしとあはれひてゆきなりけのあはれひとけもあら  
 うとあはれして手をむきあはれうせしとあはれもあはれお感する  
 わらとあはれしとあはれうけはれと無所住乃あはれをもて  
 物あはれひきあはれしとあはれ心を生せたま木鳥獸ひとけ  
 くに感格しと色をもねをとりとあはれあはれとあはれあはれ乃

けりひよりの体へまものをや

曙句合序

應道彦需

をりやあつちもあつちの心まきうすとも後こゝの韓非といふ人のいひける  
うりやあつちもあつちの心まきうすとも後こゝの韓非といふ人のいひける  
はつちあつちの心まきうすとも後こゝの韓非といふ人のいひける  
あつちあつちの心まきうすとも後こゝの韓非といふ人のいひける  
あつちあつちの心まきうすとも後こゝの韓非といふ人のいひける  
あつちあつちの心まきうすとも後こゝの韓非といふ人のいひける  
あつちあつちの心まきうすとも後こゝの韓非といふ人のいひける  
あつちあつちの心まきうすとも後こゝの韓非といふ人のいひける  
あつちあつちの心まきうすとも後こゝの韓非といふ人のいひける  
あつちあつちの心まきうすとも後こゝの韓非といふ人のいひける

~~~~~ていひ出屋なりとけりかー詩六曰詩の國とけり  
何と俳諧はとふあつちといふ國と疆界乃とて言  
葉のけりあつちといふ國とけりかー詩六曰詩の國とけり  
からふてわつち屋なりとけりかー詩六曰詩の國とけり  
あつちあつちの心まきうすとも後こゝの韓非といふ人のいひける  
あつちあつちの心まきうすとも後こゝの韓非といふ人のいひける  
あつちあつちの心まきうすとも後こゝの韓非といふ人のいひける  
あつちあつちの心まきうすとも後こゝの韓非といふ人のいひける  
あつちあつちの心まきうすとも後こゝの韓非といふ人のいひける  
あつちあつちの心まきうすとも後こゝの韓非といふ人のいひける  
あつちあつちの心まきうすとも後こゝの韓非といふ人のいひける  
あつちあつちの心まきうすとも後こゝの韓非といふ人のいひける  
あつちあつちの心まきうすとも後こゝの韓非といふ人のいひける  
あつちあつちの心まきうすとも後こゝの韓非といふ人のいひける

佛性のみ無りしは、はるかに、  
ゆふも多し、たゞすは、  
乃春ふ、  
の、  
さ、

野狐録序

ひまもす茶をす、  
ま、  
ら、  
ふ、

俳諧の、  
一、  
困、  
今、  
あ、  
お、  
あ、  
ひ、  
あ、

とてうけしてとせし年月乃職悔せむと此をけしめ  
書て文音乃法好士なりとわらふ

句帖序

水をもて水に流しゆふをわめてあれる人なりと書満る琴の  
緒多しうおとまうて替れのをとひひる人もありき人の  
えらぬをちくあれぬ物をあせんのふうたうらうとて  
わら今のは諧とこれよあをらふく無一物乃心頭より  
うらたある他意をちる人なりてうらうとあけき  
ぬふかす玉くおほくの他者のよまけくの句乃中より  
えあれをひくけかむらぬ事をすける心のあきふ

よりて人乃えらぬとひもまらうらう水乃ら  
とひをわき法のおとまうたれもあやみうのく乃乙因  
此をけしめあれぬもあらうかの野人夏成美なり  
あまけらひとくあれぬすあけらにうてかくひい

題乙因旅日記首

海におほくのせにあえまやまらうら乃けらけはひの  
すみして書つたぬらんれひうやね旅ねのあけけふあみ  
うへうらすれ心けらへうらえむらうらなひう  
あそわらんらすらうらうらにあめはあや度やいふあま  
のひうけあをけらにうらうらに死人休上り卧瀬盤に

くうきて三百余程の字はちうくもさうにうぬとあぬとくは  
らふ方あはく賡句といふ事ありて申きて廿二戸に三旬あ  
らふ乃日数を治して今は故園に帰らむとすみちのゆく  
てにいつくせり巻く韻はみちぬもさぬも野分のすく死  
みさうとくくくくく野の雲をたふにたふみて書はね  
つたのひけく多きす集くを治る人ありてはくむあて  
こいねふあてす心のあまらにすこゆらけ羅城門よ  
すみくといふ鬼あまの氷消りといふあはれあを葉をさへむ  
ものあはれあ時あまといふこころはあ物のけこにおうあま  
ぬくこととあまらあまて友人夏成美多田の森蔭のゆふ月

夜下草を採

金翠句帳序

忘年の友硯亭はねに來りて閑を多きくうていふ風情を  
もせむらに胸中をうくくといふ年のたぐもへあはれく句を  
はるたうたうをうくくわきいともあはれい俳諧は無念愁を  
うくす後中一巻の書ありともいふいふ交はれにたのらひ  
らたひらたのけうく一家乃工夫ありてや念くも一有を  
きく一有わくまてあ象とけり見ふあおむらひああらその  
物あうらに心乃師とけりてあま象にお情をうつたをさ  
一紙小画くうあはれわらうら一草をおくくあめてたのくち

筆をくくにまき水墨乃阿それと丹靑の色を好と一  
 一大觀とあまやもあけめをあまへてあに一張の白紙  
 形をあたす筆の形をあたす筆の形をあたす筆の形を  
 阿つて規によしすてあのはく廣莫乃けいひあまよ  
 阿つて規によしすてあのはく廣莫乃けいひあまよ  
 阿つて規によしすてあのはく廣莫乃けいひあまよ  
 阿つて規によしすてあのはく廣莫乃けいひあまよ

書句帳首

いはまき先つまの後阿それと丹靑の色を好と一  
 起おて例のまき阿つて規によしすてあのはく廣莫乃  
 阿つて規によしすてあのはく廣莫乃けいひあまよ  
 阿つて規によしすてあのはく廣莫乃けいひあまよ

さす處に心ありぬくれを此やうの中けく阿それと丹靑  
 阿つて規によしすてあのはく廣莫乃けいひあまよ  
 阿つて規によしすてあのはく廣莫乃けいひあまよ  
 阿つて規によしすてあのはく廣莫乃けいひあまよ  
 阿つて規によしすてあのはく廣莫乃けいひあまよ  
 阿つて規によしすてあのはく廣莫乃けいひあまよ  
 阿つて規によしすてあのはく廣莫乃けいひあまよ  
 阿つて規によしすてあのはく廣莫乃けいひあまよ

浅草及胡小引

まくすらしやみはくまき阿つて規によしすてあのはく  
 阿つて規によしすてあのはく廣莫乃けいひあまよ  
 阿つて規によしすてあのはく廣莫乃けいひあまよ

ありては語を向りつるもいふ古人いへるもあはれ文臺をお海せハ  
ふふけうこ也やけふも先達乃いひすて書すてなちりやあく  
たをあひうちすれうへて人りも尽あまくとりあはれうつ  
しややうれやう白片の楮先生

贈短冊掛辞

以住吉松樹製

姫松乃多んくく多人乃もやまをわさうく一城日あろこと  
つらひらふらよた向もいひぬねいしはくものうになを  
しを吹石主人は海あうすま海まの紫乃あま屋うにおひ  
めくくし合抱のゆくおほまぬ家他まも足まけくまを  
賀不老庵落成辞

不老庵地をくあふりつるもいさやすての人いすはま  
所のはれまうたあひ形にまねあよりりつあてまを  
あまあまうつをわさうまをすま屋うあれまあ街中  
物にほくまをまの山もあまあひへあのみひや冬乃  
日うあうた方をあつて買日乃たのみふ春をまをひまを  
市やうら乃りうあはひけくうはまにひまり此庵乃  
のまれま地すまあまの心標あまあまうまあまあま  
言季作の門はあつてま松乃う路

示若輩辞

年乃けらにもあまぬまのやまあつて月あみ乃俳諧



すくに忘年乃友とりよもあるるにや日野屋士の蓮胤はく  
しう園やもとの子をやうもせしうもあつらひて申く  
はういもあくさやわさあまらふい蕉翁忌しそ何乃のさも  
はくいあれまのまおこりやうも物さあめのはをせめたり  
く解してうしをわ法を庵下うけくお解し一のうさ輪  
扁の池片た款車吾子等にほえとびるとはありうたひよ  
はてうくとよと侍りりあ

新乃くはま風雅の心もはあま

賀巢兆書画會辞

万花枝を辞し狂風おもてにあり候より記以書画の心をも

おどくせして舊友巢兆同好をあめ庭をさうくすみ川の  
落葉を水俤にたゆくとくみ入樹々の木乃めを落院下  
にほをさう此日天けと風おと屋に春のこらめもあつら  
をこはる一草を集る門人等東脩のほみ物をもてりよ乃  
費にけむむ守此の世の中めれをさてひるうたうとあま  
りもれをすいさうさうす凡四民ハけくねと余乃控民  
伎藝をもては服乃はくあまうあま人をねおあし世のつふ  
人りうり世を會る心うもあまはうまうらあぬと打あさ  
らめらる乃あまうけく世をさうさる女乃仇あうらあまは  
人のいひあひたむすあにさう風情をもてはあていな

みもとてはこくといふあひまきけりもはねりく  
おのよにけりあけとぬにさくちあくく無欲清操の人と  
人もるるあふにけりなりて志も世人よりあへ心もら  
ひねれ家黨あれを瘦あへん中笑ふ也その伎はあへ  
人へももるく一句一帯乃草痕人をもりんとつ  
もれふあまを賣ふ得やういふものもあまの事れ  
丈夫乃心何を恥多れをけりいひやちやまの兆画氣韻を  
ひひや筆端妙をあまふをやそれ人來り買へくわき  
書画のりあひいへるも藝はあまの集會乃めてくうら  
まのあひたうちり賣ひとけり乃集會乃めてくうら

屋中一はよくけりろあといひやう三章をひねりか  
しそあふりをあすいよく此伎の世ふもひろくまをあひ  
ねふとのわきはと今もあけとめて藝ふあをいひまを  
おのよ乃

花鳥乃身をそをなつあけりけり  
とれ人の子履も見申是門の花  
おのよあま人をのあけて春をゆ

題燕石談古室

伏生記臆稗田乃うく物おほえりりてより世の史官

筆を片一かすつくむし一乃あるもを今乃世にありて  
めのほへよあるあまの徳をうたりし厚くもろくは古今文  
物のよしある治乱のさふく乃いさほひを人くつらうて  
足致あましくつる字のすきく此國のねえ後うの功  
臣勇士そのおもくちあまはひまても多今あにうとき  
かうんやうにいひあるに麒麟閣とつらまにうまは  
うの画やうもひろくにありひるれうくあまの人の  
いひはうふ孝子義士乃傳れ今乃世目ふちあまの  
うらまみにかうくつらまをその實をうつあやうを  
あまの心の中にうまはくもうと文

清代のわけ一ぬ秋霜三尺乃ひるる月日やうえにてせれ  
あまのうけけれをありひはれ号乃本す来うとたへ  
うらまを片へおれく一海一れうて月毎に集會一あ  
つらみに後とありせじうよをや飛耳長目やもつら  
つらにきたえまをうよあもくふ海あれせう  
あまう舌おもくあま繁あたまものこれをもあま  
うらまの厚文れねと多田乃素多をたのめる友れ  
鳥乃つらつき友の目をうら子たあ不世人く乃うあ  
つらひらううらうらま一片のつらう水無月の水  
うら一れ厚規をれうてうらひあれ時ハ寛政十と

いひて又ひきつをくそへけり年也

寄相撲題言

其の声をきくはとれおもてをえねま心片におあし人  
は心にゆりくをとおれゆき傾蓋あつるおあしこい  
はふ事ふやわあしあとの聲をきくそのおあしを  
もはつる乃小松ひくくをわておれのあらし葉のちりく  
ふ交うそしけすて此因のけいひひしをほくしまたうひ  
手ひをさる為み作意のちりくをあしそよほくにおの  
心路り誰ハ此委に工夫はくくれハその場小あし葉ちり  
けりちりおのひちりて其聲をきくそのおあしをさるあしち

せいせき壇光といふ法師乃言雄の文覚名をさるま  
おえてハさしらぬにみち乃ほくにあひてま屋川をきくま  
法師あらめとおしあてにゆれよるそてなまよのま事  
けりしや小首か知ておあしそその後得意乃ちり  
ふくけり乃家そら世捨人のちりハ奥の家所行あま  
ひやすちにすさぬるまなまもく家たをひあまぬ屋  
あひく書状よひあしぬの句も乃あしにきくえぬ  
屋にけりゆきさるハちりふあしぬおあし作者と  
おあしちりぬ家ちりもあしひちりすしにま庵  
あし入るちりくに状あしせり合点をまあしはちりぬめ

わくもたふをれこひひうぬる時ハオコナクうまき中  
あひひて多々にその古意をきき其のあひてをみるゆに  
すふ古きを物に書付て舊古乃まうにせむとおひに世小  
ある天狗形をくひもけか乃壇光うすうにわうていさ  
一番あこひひめやせん中ひくわう呂

梅園記

梅をおほくう急て梅園といふ所ハ松をうけしめて松亭と  
号け拍りうきて拍菴かといふにけはふやうせうる多きひ  
りもわくは傍り寺り安樂寺中ひ彼はきく此みて  
ら乃名を其の梅にう急かふに急ひあるわく

その南に菅神乃み屋一筋り急ていつきはつふ事りゆ乃  
やうしうきりあきあきしよきり此宮居り文雅の冥  
急をいのり渴仰乃あきしに河愛樹の一角中枝極その  
てより根をひあき枝片うへ年くくに芽をわらわら本を  
う急そへあきしはく大く花のふ類を法くせし直脚ハ  
野梅枝すくわく座論ハ花おほくしそあき多し緑葉ハ白ひ  
ふちやくに豊後といふよハ其の實をまてを急せしハ羽り  
うあきしきくハ寒紅梅乃多きひあきそ鵝梅といふハ花おほ  
まに消梅ハけく急にけくをりふあき龍乃あきそ卧急  
この雲結あきしひく急きもの急の外ひく急

くまをちりあがりす色におのくくちをやくのへ媚をほくす  
かくてそ江南乃天氣度嶺の色に少ほひみちて居て園の名  
やふなりを体ちりりその中に小亭をくく賓主四五人  
篠をすほめて狭しとくも冬をみとらまをふらき柱りて  
やりのうちよとあまの心もあけれ一炉のこを身に身を  
ひす厚く大なる酒瓶をす急後圃まおれのほくくつうさ  
芋栗のり酔郷に客成じうつ時三万乃榻をくくすも  
まうれとそたりのま体凡此園ハ雪踏にふくく春氣乃  
ゆふりたりりしはの山乃極ゆるも人の園乃まちり  
けく氷肌玉骨けめてほあむとそ花小対しと酔けり

るゆ酔てそれよむくす所不時けし主人の花よりれる  
人々酒り隠きく人々れもく風雅りかられり人れり  
今十年乃むり江戸小所をへ家折深川乃古池を  
あつ子多家にその世乃とみあて居せたる芦乃あてとそ  
を根ありにして為仲乃りる長櫃とありりりりりりり  
さめゆきまき此盆池よりつを池成厚くそ園阿そ嵯峨の  
入道々此亭にけりれをう乃句を石り急りりりりりりり  
上人の善通寺乃松乃野せりあそ象をけみそれのりり主人  
乃心様をうつせり南ハ阿多々羅根りむいり万葉の古名成  
志のい北ハ磐石手山りそむあて源二位乃詠をおひあきりり



ふもれ也

素卿自句合序

かたはつと乃はのうへにぬる所の玉をあはさむ一ハ名  
利を以て争ふ事あるはれど一其にひまのたつとをひあり  
同類乃句を蠻觸なりかとわまふ事あるにくらちちをちと  
わまふ事あるは他者いひとをたつとをちもとちちをち  
ちけもちちをち甲乙をちもに一時乃わちひとをち乃ち也と  
ふりかにまう一西行上人のみもすを河なり後成郷のちと  
ちちをちちをちけちちのちわちすめち勝鹿なり在り  
素堂老人それなちひて自句合句を判のこちちもちと

みつり書ぬちちを先従ちちちちちちちちちちちち  
判者もみつりちちぬちちをちちちをちちちちちちちち  
ちちちちちちち素老人ちちちちちちちちちちちちちち  
ちちちちちちちちちちに興ちち心のちちちちちちちち  
ちちちち素卿ち句を他ちちちち名利乃間をちちちちち  
ちちちのち乃ちちちちち是非ちち心ちちちちちちちち  
ちち意匠世ちちちちちちちちちちちちちちちちちち  
ちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちちち  
ちちちちちちちちち迷中のちち是非ハ是非俱に非也也

題空則是諧後



急はうー乃返にいー夢さ子成まよかの夢まよまわひ  
 したもれ中に書正はしとひらうと雨とよまのまをうんふり  
 かちやうやくぬ管乃小筆に鬚はあさうなうくふの草  
 中もえとぬちとよりちとこれの鑑ちてあやうにぬれて  
 踵のちやにけちけちとちて草履乃尻をきて足半と  
 けもれまけして鳥のふとめく甲うにひけひあけとまは脛乃  
 けささて泣うにあさぬ世に能造一とあさよめけ 裳  
 来まそうなうけ帟乃地獄一かつとやうめまそまうけ  
 あさにはうい捨さ紙筆の罪ほろかりにとそ六あま  
 めえとといふ物ちとてすうにうはぬま嵐のわひ姿ま

続詞花集  
 人びかておて仏  
 供養一うういひ  
 不雨のううて  
 袂ふかううれい  
 礼盤ううわさ  
 膳西上人  
 いーをたてひ  
 てもまうんも  
 足ささうやハ  
 法のうたをう  
 事り

かまを後乃世もけそとけいそく膳西上人乃説法一  
 けう所にぬりうて衣の神ううまうまいもろやハ法乃うけ  
 ち理りうと存ち板乃すれをえんわひけい一に是ら  
 けううふぬのありまうれといふくもうううしてるうれ  
 家にくちあて破さううも多一本とねじやうけて求め  
 ちる赤もと紙の古骨の荷葉の露にひるうねううとちけ  
 成口人う肩脊にうううちあまそ中乃ひとまううやう  
 此古傘のほひうちけち浄佛の輪後光といふもれおひ  
 ちをうらうけま六此中に攝取せられて四十八章の骨くも  
 弥陀の本誓まほぬのみあり我ホ小根小樹のあう凡夫乃

一味の法西小うふほいて踏すへうふ柏子入へ一遍の  
称名紙やうもせれ功德豈いあうんやと果ハ  
よみまわうて戻まわうてをうて乃あうた麦宇の物語  
せうほうに随喜の筆をあつ取て此画傳へはえ侍ふ

麦宇句帖序

観音めくを乃詠歌帖道者頌礼の念佛簿かういふ  
ふらひは吾ももう乃句草紙といふあそふ處由く処の  
人くに狂句いふつ書うてうてそれさだのすれ人を  
あつめ候とあ守はまそ三日の糧をもうけういふ  
独行すふ風雅にあふとけ活計也吾友麦宇の

あううてみちのく結果のけてうてあめうん中のよそのあう  
まにのをみてあをむきうゆい夜乃雨窓をあて山館に枕をさう  
ゆい曉のあういさうといひ野亭に杖ひくあうたうう  
あうう友うやううう子うあうめ子丹青乃業も枕囊せう  
うて粉本紙あつうう事あうまハ筆のたうみもゆいゆうんや  
宇うまはまうとあう胸中一味乃俳諧紙あううあまをうるま  
うくもれ屋うて心の友とわうてゆきをうてまうあめの人  
ゆいうまハ五歩に友あう十歩に朋河季堂五種をゆい  
うせんやうと山水泉石の月うの旅ううをゆいゆきすうて  
雲烟の眼うるまもれみふ吾画中乃趣くあまうハけうに

古人の徳を明しけしむにけふ此人の心多うこそ此の紫  
ひきつりもあつたるをば一せう一むらび張塚の外造化を  
師中し中心源をゆきといひしりわり存城あをせふ物  
すれまふまは城この軍家乃序をもあふんあふんしと湯に  
書てあつたもれを多田素老樵夏成美

日牌帖序

安期羨門我を名をきく千人今つ川くこふあふ大椿  
靈龜わを其事つらつをふれはれはれとつとをを見れ  
二龍齧牙すくやく白駒蹄躡猶か海一誰乃人つはひ  
此安婆り位もつるはれはれと菊阿佛々上手も死ねると

歎せし多うこそ哥詞鄙也といふもそ心あふん耶あふに兼應頃  
より以来の名師の終焉を諸集に探るとそ歳時をはさひ  
うみ輯録して一帖の日曆とすそをふにふとて一を  
ひも翻讀せん人々すへしと語乃因をゆきしてそ  
佛乗し帰せん事城あふし一ねうそくハ此風雅をもて  
あつたねく一切りほとあふ吾木と店生と共ふ上も此  
地位小至しんを帰命誓首敬白

藻實草序

李義山、雜纂ありてとる清氏、枕しりし清補、物  
々袋其角、雜談集みれそ其趣をうあはれり物々李

多き書子も何をよみ所ありて母見えねともあ  
 おりしるにえもてゆふ世の中乃憂喜もわすはるに  
 あはゆふあやしきまてふいふあとおりのに多きれあ  
 人の心よりつる家所をいつともよく書出ふ由急なり  
 しやある人のいひたえせうれ多くみへ見たりたえはとせ  
 所は頼芳老人の書すまみし物何りちのち乃まを書  
 ぬき辯の多くみれり哉まみれ狂句なりあはく書せ  
 ぬ書此まみれ乃事わもあてんむとわのみにけり何  
 事もくまにありあり心中りまもれりまよふすてあは  
 居る心とわいひて居るぬれをけりめふりあやわいふ

清心所著の草紙取て誌之

發句帖序

すみと河乃蘆荻霜不卧て人ぬ終る字乃扉すり  
 ころくせんそ物交に備中の園より書音所先の中  
 挾室に膝をかき談笑ありすまわらま外主の白  
 楮一帖をよせてあれり物出はあまきま由はて潤筆の  
 物とて一尊乃る酒試たるるあせ程蘭陵上箸のあまひ  
 閑寥乃る友あまのまきし見をのむ清心のみ  
 清き乃女のをる衆あまひうらに書をくく名あまき

孝家ハ侍らうなせりしやとれしのたふひ行ねとあゝの  
好士の備くくあゝ世の俳句ひくは書しあむ共たの  
はくあをし記もれは清きもの所とらけき物あり  
あゝれあ物あてたのく種勝乃をまよくまてあゝひ  
はくく面をあゝすふん地やせむはくハ風土の物と學も  
此一帖下をまゝ入て常にくく帳中の秘とせむし  
是一歩をすめ候しと名所を志ふ中いへれあゝ記讀を  
りやとー彼鬼貫の禁足紀行乃たふひあもよとくは  
しとそれあゝ候し乃より記を大りよ候あゝは候記不  
ほめてあ田老樵復成美誌之あかりこあゝもはり

めくくしりハ何れ

月川上人追善集序 應塘里需

法を觀す事正しく心に着すとハ邪におあゝをい  
止觀乃文を心くく世よりくまゝ法師ありりすて  
佛像經卷よとけあて湛汰瓶ひやも身不とく教の  
ゆくて今の世とありくはあゝの世控人ゆりあは子に西  
行乃抖藪をまゝひ芭蕉の漂泊をくをみは西下末に  
杖をまゝあゝ候し何家葛飾しり所不縦横九尺の庇を  
あれてあゝくすあゝ事もりく讀經礼佛のほゝハ狂  
句をまのみあゝをまゝ身のゆれ所とせんあゝりあゝ

其由と別号を人のきうはいつるにまことおひよる事の  
うふけいとて居て其由乃名紙捨て月川とよるれりるま  
椋室をもちふりのむぢまはくはうらうら乃庵乃名紙と  
すてに世を捨て名紙すて風雲にまをくある心の中いは  
るる涼くまらむるあやうもかひまままといふ一此因乃海  
居まらみまひいおほむ神乃ままの宮とのあまひい  
多賀大社へはうへてそれ社造営の事あり執おこま  
それらもかまま心乃冥意にまらふれり居一れと  
みつりもあまひきくくかまれくてはひに寛政庚申  
四月廿日大月かまま休せ居りひい一それとみとん家き

物れままはとてうのいひ捨り一狂句若干をりかたり 求て  
何方にわくらまらせんといふ一國人塘里等々あまら乃心紙  
りま わままま上人乃久一死知音とてうら志まらくもいほ  
りる庵一因縁あまらねハ一ふて書まらくといふ一懐舊の  
あまら紙拂てまれをまらす此集やあまら一と上人の本ま  
まらあまら居り

題 祇徳法師句雙紙

ゆふ庵の山にまらけり一とて杜宇乃啼るるふ有明月一  
馬嘶て雲雀のまららるるあまら野の原紙は甲り花舟のわ  
まのあまらてまららるるあまら益の庵すまの松の葉蔭ま

薰風を懐きして志高くねむるに夜の屋中よりあまらば  
死も多き月々の轉變旅を所をれりをうらまはせ俳諧の  
連句をいふもわづかにかきとゆく事一紀もくせあは  
やしきすへて世中にたぢめら積家人のすきみも帆あけ  
船の尾りに多す記ふる切りしうし月々の旅をうらま  
せし何れやけさハ翁もいふ事ありり世を旅り代々小田  
乃とまはしといふく東海道の一すちもあまらぬ人の風雅に  
おほつるなりや

吟社懐舊録跋

人乃心のたきしうらまはせ乃あまらぬやわきにいひし記

人しあまらぬ少もさあえあまらばさとしのつうまれよも  
心おろしき友のわづかにわはれ人のあまらぬをうらまはせ  
形家へしわづ蓬窓りあまらぬ月多記よひの淋しき折  
くひしうらまはせ名あまらぬく乃わづあまらぬ年月  
流書よわづあまらぬ人あまらぬけりあまらぬ志あまらぬわづまらぬと  
扉のそしにま付る物あまらぬ所あまらぬ蒲生の中塾生、物  
あまらぬに彼人乃伯父吾扇老人うた乃あまらぬまあつ  
めて返す懐旧録と名はせて平等回向の念佛朝申あまら  
はあまらぬより老人あまらぬあまらぬ後世の志乃むらぬ  
形人も念あまらぬ見を扱しあまらぬ同好の俳士よわづら

あゝ唐ん中をわきに校正せしむ老人のいけふ世  
たふいよ志くは志く撰すたふく志のいけふもあ  
を次まきりひく一記老婆心あり紙とそれあつを  
あふひは換益しと起しけくは紙をるん人たふ  
紙紙あくしもねらう紙おきあひむらんハ中塾生  
福ふひ也といふをまきわまにひく一記人く  
告まらす事にあむ

書句合後

たうすひのお落しけ乃草草中水持くいおま  
ゆ支に世句合し判せしむ人何れはくくあつをひ

まうハ心を入侍まきくそれハけくうけふ記あて今ハ淋乃  
柄も朽ぬへた年月くねらわすまきくあつをひ  
いあくあつくくあつをひあつをひあつをひ  
東郭乃瓜喜泥の芹所ハけけ味ひあぬハきを齒をほ  
ろに口すあみく老圃の身ハ甘支をも淡くこねて申  
あふひおほくあつをひあつをひあつをひあつをひ  
それもまきれくの姿くて紙ハ是非くわらへか  
中

書句合判辞後

世ハたふあつをひ鬼をくを画らるれハあつをひ似けあ



けもあぬ一ふおほ申た犬馬れとの目よりけりけりけりて  
それ物もきくしてはいくまをわとれおれもあれ常に居  
りけり字すにわかれ人々の目より心もよくおほえ  
あるる物もきくといさうれあうひめもあふい多しなま俳諧  
の短句はくもほくおふく世にいひあまくる俗談をもて  
けりあはれまはすありのならめ耳たれぬへれれ句合とり不  
えれ小判のあつ繁くも一しこのまじ人あはれわき多田乃  
森りあにねりせをのり聞あまそ琴をあくもさくわ  
きすいさじや峨々洋々乃音りおいてははいおへれあ  
えれ一けり目よりけり俗談あまくるさくせり

あをさくわき侍のまは心乃あけりわらあぬ處あ  
るけりたて犬馬のくまはれすれあまはれあふ乃ま  
に人ありて曰他人屋上のあまもわくにも自己身上の  
風騒いさふとわきあまていさあわらあひり乃あ  
りていさ他人の手をまけり乃まはれり

畝はきり序

山田り水をほくすまらうけりけりけりけりけりけり  
けり畝つらりと名のあ人ありあけり柄も汚ぬけり  
目ふありあけり田子乃裾をぬりて是をいさあれり  
風人騒客乃心のあまきたてあまあけりけり

あゝ〜はまを秋乃田のみもたのり〜花實やみね  
おのひふめたり今の世乃流りハ稲葉の風乃う流〜  
いふも姿のむつ〜きをう〜おのひふ和哥ハ文覺らうて  
泳ふやん申をさ〜あ〜き也ふ〜ひち〜を〜え由  
世乃う〜も〜に〜と慈鎮和上のみあ〜  
あのは〜の文字ハ〜とて此国の  
人ハ哥乃みらをは〜おのひ〜  
風俗也と此撰者もあ〜困〜乃流行を〜其  
境界をた〜心あ〜撰者ハ三鴨乃麓ふ  
雲蓋戯〜乃数言を題すふ〜ハ多田乃老圃夏

成美也

書水音集後

い〜佐國とい〜人乃りけの花〜おのひ〜  
あ〜み〜園乃茶葉にあま〜  
あ〜け〜や〜杖長〜蛙を〜  
あ〜て秋乃さ〜声をお〜より冬お〜の土ぬ  
こめ〜山田に水を〜  
あ〜ねを〜に〜人乃  
あ〜を〜人を  
ひて其棠の木もれきり〜杖長〜の人なるぬ

櫻句帖序

佛よははらう乃をれをたてまつりて後乃世うあてきりえ  
おれ終ひハ西上人乃花よりきりて心けり出羽の國  
大館淨應寺とりにひい木乃橋ありて誰此みほと  
多にうふ種をたてまつりおれけん今ハひろき國乃中に  
あふひれくおれ終ひあふ木ありてかく慈眼よみそあう  
あふ終ひへしをれの終ひあふをぬきをぬきぬき  
跡はるるもれ多くにわひ市堂よりみち終ひハ弥陀乃所ひ  
う里をとてはるるの極樂あともりへし是あうあう  
一味乃法雨より深ひて心あり草木も浄土の縁をむす

あうしうにあらふ人の一句一詠をあうて花ハあう  
くあうにらふも色香のこみあうはるるを  
句帖とりよりの法うて人くに筆をゆりて此あも  
む交をけりぬ書法多うと尋風乃許ういひあうぬ  
いと目ふえぬさうひあきと吾もあう花よりあうき  
あふにおひあうのさうきをあうすう極樂もはめて到ふ  
所ときけハあうをけりあうはるる千里の外乃すう川の  
花の蔭あうてあうをけり流る筆をけり

句帖序

春乃雪窓をあて挿いさうひり履をけり杖をひりむ

下も老懶せんさあくらん一炉ふぬさ炭城おほく  
吹おうしてひら茶をりつもれもていねます茶をすふ  
あまらうれ何う一乃老人られの世捨人なりと膝をうへ  
て終り腹ふらう一おのく六盤の奥り入茶具なりつ  
み川取めて是ハ唐屋うの物かまハ誰くの他もるおと  
おしりふりふにつめて茶中ひとらういふやうも茶を  
いふもれ名あまき人の書付あまみりものもせれふ  
心うけまて居て茶のものとまらやゆもあま た  
居ますもらうりとも茶乃湯に用らうとえらひはしと  
るる茶はあまの目さうやいふあま利休のまらう

其角々雑談も書あれた侍うれた人のもてあまひ  
或ハ花押をく加へる物をえていふふも故りれた器あれ  
おのま心にもらうれもてみるゆゑにはあまのまらう  
あまらうゆく居れふや六塵の境界も物りげこれに真  
空の理をおもひあまらうひふ佛のけりも中作ま  
もれくしとらうもいひあまに此まらうあまもまら  
佛のみらあまにうあておひいふまらうの事らうりあ  
みまらうらみわらうらう秋田乃一棒々句帖とり  
ものけらにものまらうらう人くの句をる  
もはらうらう今の世ふ名たる他者乃うらうら

句あるはあふ交故にあふ人あふ名なりおと病き人乃言に  
 はくされてたよりいせ乃とおふあめりいひいふにその真よ  
 せりして句くの骨髓をよくけらははくあのはくおのりあま  
 所いふいせ侍人形物くものをももをいへく屋うて筆  
 中りて序の心に去付侍る

勝鹿日記の内

とれいひつういれ日形くいひつうくや頭いれよ窓の戸  
 もあま王上野のこれみいすれいれいふいふいふいふい  
 めうれよ書けりいれいりて人の入来といふいふやあといふい  
 すいりやういふい交けいあ。白の茶紙をひらひと大けり

かびてまは中のようにいれいあをかぬ字れいりうたうめい  
 れいりはくいひまおはははくいりくやありたて。かひ一盤  
 すひらよみらけい屋にをいひい此茶よ今の世乃やうに  
 人にて何とをぬいせ鎌倉の旅館のすあわつてをいひて  
 ひるやうても起あういよぬを榮西上人乃濃茶一服あてま  
 けいせ給ふにああはれく心よりあをいひい喫茶養生  
 記といふいふい付とをい給ひりあといひいつてあめ病をい  
 らのうをかうああして

竹を見え家心せ給りて春ハゆく

四月一日 花の流うふ山うせもわら葉の梢よ吹けりたま

ついで多田の森乃みとを居りく夏にあり申

小海もくはらうく松の朝霧の起

金翠吹石蒼波をとりあき人く来りてつとみり  
題をとりち句をよむたのほく物ほくめははうせめ死うり  
あふのせいのひおれふかしの餅とよりの館乃ら満きより  
味曾調へあふつとに心ひくあふといひてわらふ旧國々小豆  
乃らに秋のをこらちまきりたふらもみ那らくをいひて  
海とくふその日乃類

松山乃らぬまにうたほくきき

ふちりに油けりて過地藏

二日をそく起るを志居りくはくひ庭を眺めてありし  
ぬかに物の本を満きりてあつとをぬふ新淺草のかみ  
耳もきにひきあふゆめあらにおよひ城をまて十はく  
みそよ終といらくもはく居りりおほえてうたはく心いさ  
けと海くすひく乃雪のちくくをあき乃をりくまる  
おとまては終と目ハけえりあふみ此五来とり書音  
あつとくくゆりくひききまふおちにくく書てはらを  
江戸小町をひらふりねとお海くく去海せぬと

五来をおりふ

けくねく乃袂りうくまけつ裕

其の便りありくと抄流しよふ来れ浪花のまゝ人等  
 清原氏乃女の名をうきて書ふも此の所の貫之ゆ  
 日記乃ちと家系をかくこまはげまはく句をわく唐を  
 唐かたの画もおのづかひしうゝめはて唐のしる系  
 はてふとけにけくまもと今世乃上もといふ家長  
 齋魯隱自樂堂の外乃人々ち額をわくを捧をき  
 うめ記書るも此のまはり見はめなりあつむけめ  
 ちとあつむけしうゝけしよむ附合のめと記句に  
 うとるゆるりよは旅ゆ人乃浦里に眼をわくたむ  
 らん地をすり發句をわくもはちかかかうへかか

ろりにすあ家もあ人等うはを海流ひあ家いせ  
 多形と鷲乃あ急を筆の上の流るのせあつむた  
 唐をむくけりし晋子丈草あつむ人のあつむひ世  
 けをふあもあつむねくもはまね

夏の日もあつむくはむ

中そほとけく日くまねあつむふに長齋二年あ  
 ふみはけりてわつひ一人のいう心乃く記あて  
 此はいふ体の句に心いまをよあつむその本才の  
 ちとけあつむれをかう句あつむにあつむりき  
 きあつむむあつむたはゆのあつむの餅乃みそのうま

夕ひそめらむあけのきつらに秋の風やぬらぢめけむ魯  
隠はさみ川に江戸より人ありきみ川舟をきもふ  
して志ほさぬは鷹のさわくをえしてききうに古園をおひふ  
心をひひあしすれとあや目のまへの屋うちを

すみと河あしうをぬくは雨古鳥

三日 ぬふりてのちをきし去りたすれとあをむつり  
きくに那屋めあを屋つり千住とりよ和よりあゆく  
あしうちを二本あしうちを

あやの子やあしうちをみまはしうちを

四月もあめ屋もあしうちをききうちを

あしうちをききうちを降はききれむと人のり

うねるや桶の中やうちを五月雨

四山藁卷二終



鶯村畫譜抱一先生  
曾中山鵬齋先生  
高山樓画筆文晁先生

全一冊  
全一冊  
全一冊

此畫譜當今天下之人瞻仰之所大家各自肉筆之鑲刻之画則先生親筆  
多至直其堂外其室入階級下其薈羅之所昂然人物悠焉名山水霄漢飛  
禽山野之走獸草花艷麗之樹木鬱蔥之藻隱之鱗介土之蠢蠢多至遠守由  
間在所之品類之備之云云水墨之濃淡之交着色之疎密之示一丁寧  
親切今時現存之衆画譜之倫非不往昔昔之船米之畫軸多至一尺此画譜一  
微宗之鷹風之逸之東坡之竹雪之折之云云其流麗清新寔一仰之貴也  
各其意匠異乎一尺之約所神韻之高其興致之深其殆一世之風靡也  
二其目之悅也而己之未夕見之也到之未夕見之也物之弄之如女博覽  
多識之資也上之性情之養也視聽之博也術之畫譜一部也盡也云云賜顧之君  
子試一表之閱之我言不妄也

六

六

文化百人一首 酒井先生筆  
蹄齋北馬画 全二冊

同 女今川入

女今川 女子習教訓状入  
酒井先生筆 一冊

實語教 頭書入 一冊

隅田川往来 酒井先生筆 一冊

増補塵却記 全二冊

日用算法記 一收摺

萬寶年代記 一收摺

新編の歌 野呂愚先生著  
全二卷 全二卷

要語歌 同

繪本武者大全 全二冊

將門一代記  
八幡太郎一代記  
田村將軍一代記  
朝比奈一代記

職官志 蒲生伊三郎著 全七卷

淡海公ノ令義解及ヒ集解六國史扶桑  
記日本紀畧類聚國史職原抄官職抄  
等ニ依リ唐ノ李林甫カ六典等ヲ以テ  
皇國ノ職官ヲ參考ス職官ヲ明クメント欲  
スル者座右ニ置クニハアルカガレ書也

文會業餘 松澤老泉著 全四卷

古今藏書家ノ印記措紳諸侯方藏板ノ  
書目唐山ノ官板ヲ 我國ノ書肆翻刻セラ  
皇國ノ官板ト混カシ正ニ通行本異板ノ書  
目活板翻刻ノ書目非破主客ノ問答ノ書  
我國五六百年以前大藏經ノ板有リ考ニ我朝  
古代武家或寺社等ニ印刻ノ書目其外書目  
掛山奇談等ヲ集ル書也

子

46.12.29 子行書 500

